

爽秋の小山地区文化財検証調査探訪

実施日	2020 年 10 月 27 日(火) 快晴	参加者	13 名	文責	まちだ史考会文化財調査 G
概 要	テーマ：小山地区の文化財、史蹟、伝承を訪ねる。 小山地区は、近くの 田端環状遺跡 で代表されるように縄文時代から開けた地域であった。江戸期においては当町田市側と境川対岸の相模原市小山地区に跨る地区が小山の地であった。これらの地区は平安時代から 横山党 の進出により開発され、源氏との結びつきも強く鎌倉時代においては 和田合戦 で滅亡するまで栄えた。背後に多摩丘陵を控え、境川流域に位置し恵まれた地形である。 東西を現 町田街道 、南北に 旧鎌倉道 、 大山道 、 浜街道 が交差する地形でした。				
コース	町田バスセンター～横土手バス停前－ 横土手記念燈籠 － 御嶽堂稲荷社 － 秋葉灯籠 など－小山センター－ 福生寺(お茶坊様、境川翁記念碑) －片所谷戸・福生寺墓地：赤痢追悼碑－福生寺前公園(昼食予定)－大正橋(境川渡る)－河畔空閑地①石造物群－ 蚕影神社 ②石造物群・宮下自治会館－ 天縛皇神社 等々－蓬莱橋－堂の前バス停～町田				



萩原四郎兵衛を称えた記念燈籠



福生寺本堂



お茶坊様 (智海法師墓石)



蚕影神社脇の石造物群

蚕影神社



天縛皇神社



天縛皇神社 阿形獅子像



養鱗学舎 開設記念碑



天縛皇山蓮乗院無量寺



福生寺山門前で

見 所

○**横土手の逸話** 境川堤防工事を行った萩原四郎兵衛英純を称えた**記念燈籠**。寛保三年(1743)八月の大雨の被害が甚大で、名主萩原四郎兵衛は私財を投げ出して堤防工事を完成させた。今でも「横土手」と呼ばれ、バス停に名を残している。

○**施弥山慈眼院福生寺** 宗派：真言宗智山派 開山：玄亮法印 開基：天野孫兵衛清彦 寺領十二石二斗の御朱印を領す。

由緒：天福元年(1233)七月玄亮法印、鎌倉幕府に正観世音を祀ることを奏上し、翌文暦元年(1234)**北条泰時**より年号の一字を賜り**福生寺**と称す。慶安二年(1649)から村社**札次神社**、**御嶽神社**及び**正観音**の別当として寺領十二石二斗の御朱印を領する。

☆**観音堂** 本尊：観音菩薩立像 都指定有形文化財

☆観音堂石段登り口左側に「**お茶坊様**」と呼ばれてきた無縫塔(卵型)が祠に祀られている。正面：入定沙門智海法師靈位 右側：安永己亥八年十二月二十三日 左側：荒ヶ谷戸観音寺住五十四歳 と刻されている。安永八年には小山から相原地方にかけて「はやり風邪」が流行して、村民は非常に難渋した。智海法師は自ら入定して救うために、墓を掘らせ自らは棺に入って鐘を叩きながら往生した。(★添付1参照)

☆**集団赤痢罹災者供養塔** 明治三十年(1897)五月赤痢病が大発生し、96名が亡くなった。明治三十三年(1900)供養塔が火葬場に建立された。現在は福生寺墓地の一隅に遷座している－「片所谷戸入口」からほど近い左側。(★添付2参照)

○**蚕影神社** 宮下自治会館隣

石造物群 不動明王石碑、阿弥陀如来供養塔、月山・湯殿山・羽黒山参詣石碑

○**天縛皇神社** 祭神：伊邪那岐、伊邪那美、天照大神、神呂岐命、大山咋命

創建・由来 天文元年(1532)、明治四十二年(1909)二十六日宮上にある足穂神社に、天照皇大神、神呂岐命、大山咋命を合祀し、天縛皇神社とした。

註：足穂神社とは五穀豊穡の皇足穂命(すめたるほのみこと)を祀る神社。

○**天縛皇山蓮乗院無量寺** 宗派真義真言宗(高尾薬王院末寺)、現在は智山派

縁起：天文三年(1534)僧長尊が安楽坊と法泉坊を合寺して一院となしたと云い、元和元年(1615)から翌年にかけて、僧円西が再建、慶安二年(1649)寺領八石四斗の朱印を賜る。元の本尊阿弥陀如来、阿弥陀堂今は無い。現在は不動明王。天縛皇神社の別当寺。清兵衛新田の開発者：原清兵衛の墓がある。天保十六年(1843)新田開発にあたり江川代官所役人達の宿泊所にもなった。『席順』が残っている。全国諸大名の履歴・所領高・官位・役職などを記した記し、江戸城での各詰部屋別に貼られた短冊形文書で、貴重な歴史資料。

(添付1) 小山地区における「はやり風邪」にまつわる民話(お茶坊さま)

『小山町の石造物』 まちだ史考会刊 より



場所 小山町 2524 番地、福生寺西側墓地入口

連番 228 形 式 無縫塔

正面；入定沙門智海法師霊位

右側面；安永己亥八年十二月二十三日

(1779 年)

左側面；荒ヶ谷戸観音寺、住 五十四歳

寸 法 単位：cm

本体 45×(上) 径 23× (下) 径 15

蓮座 (1) 10×径 30

丸座 9×径 23

蓮座 (2) 14×径 42

六角座一辺 10×23

台座 (1) 23×66×55

台座 (2) 3×74×75

全高 114

解 説：風邪をなおしたお茶坊さま

この墓の智海法師が在世中の安永八年(1779)には、小山から相原地方にかけて「はやり風邪」が流行して、村民は非常に難渋した。この時智海法師は、これはどうも自分が入定して救ってあげるほか道はないと決心した。そこで智海は墓を掘らせ、自らは棺の中に入って蓋をさせ、その中で鉦を敲きながら往生したのであった。智海法師は入定する時「私が死んだ後は、お茶をあげてくれ」と遺言した。それ以来、村の人々は智海法師の墓には、風邪をひいた時治るように願をかけ、治るとお礼にお茶を供えるようになり、「お茶坊様」と呼ぶようになった。

昔は欠けたきびしょ（急須のこと）でお茶を供えたものだが、いまは湯飲み茶碗であげるようになり、いくつも茶碗があげられている。また、八王子あたりの芸者衆が近年まで、お茶を引かないおまじないにとお参りしたと云う。

－ 「町田の民話と伝承」第一集より －

尚、この墓標でも判るように、この墓は元は三ツ目荒ヶ谷戸の観音寺にあったのを、後年当地に移したもので、観音寺は廃寺になっているので、多分その廃寺になった時に移されたのだろう。

江戸時代には諸書に風邪、風疫、風疾あるいは疫邪といった記述が見られる。また医書に時気感冒・天行感冒等と記録され、その症状から推してインフルエンザの流行とおもわれるものがある。流行ごとに世事にちなんで「お駒風」、「お七風」といった呼び名をつけ、その病因や症状、流行の速さや死者の数を細かく観察し、語り継いできた。また川柳にも「はやり風邪十七屋からひきはじめ」と十七屋で流行し、あちらこちらへ風邪が運ばれた様子が歌われている。「十七屋」とは江戸の日本橋、瀬戸物町にあった飛脚問屋のことです。上方から東海道筋へと伝染してきた風邪は、江戸では当時のターミナル・飛脚問屋からはやり始まった。病気の発生・伝播の経路を見ると、ほとんどの流行が先ず長崎で発生し、続いて中国、上方を経て関東、更に奥羽へ東伝している。

長崎が当時外国に開かれた門戸であったからで外国から入ってきた感染症であったことを示す。安永五年(1776)の流行は城木屋お駒という江戸一番の美人をモデルにした浄瑠璃が当時ははやっていたので、「お駒風」と名づけられた。当小山地区で猛威をふるった「はやり風邪」は、この「お駒風」との関係は定かでないが、同じ安永年代であり、何らかの繋がりがあったのではないかと推測される。

コロナ禍の真っ只中にて 編集者

(添付2) 小山地区における集団赤痢罹災者供養塔

『小山町の石造物』 まちだ史考会刊 より



赤痢病死去弔魂碑

場所 小山町 2344 番地、福生寺墓地東側 片所谷戸入口横

名称 赤痢病死去弔魂碑

昭和 56 年 6 月 27 日 小山内裏公園より現在地に移す。

連番 252 形式 山型角塔

本体 正面 ； 赤痢病死去弔魂碑

右・左面； 罹災者人名 （9 6 名）

裏面； 明治三十三年四月八日建之（1900 年）

台座（1）正面； 小山中

右面； 発起人 2 名、世話人 8 名氏名

左面； 世話人 1 0 名氏名

寸法 単位：cm

本体 $(120+5) \times 36.5 \times 33.5$

台座（1） $32 \times 54.5 \times 51.5$

台座（2） $23 \times 74 \times 70$

台座（3） $15 \times 97 \times 93$

全高 195

解 説

明治三十年(1897)五月、小山町全域に多くの雹が降り、麦の種さえ獲れなかった程に、気候の変動が激しく住民の健康維持の努力にもかかわらず、約三百世帯足らずの小山町全域に赤痢病が大発生した。小山尋常小学校(現小山町の中村地蔵前)を緊急の隔離病棟にして治療・看護に努められたが、その介護の甲斐もなく九十六名の尊い住民の命がなくなった。

明治三十三年(1900)四月、この集団赤痢による犠牲者の霊を慰めるために、当時の火葬場であった小山町 2893 番地(現小山内裏公園内)に九十六名の名前を刻んだ供養塔を建立し霊を慰めてきたが、東京都の多摩ニュータウン建設事業に伴い、昭和五十七年(1982)六月二十七日、現在の小山町 2344 番地先の福生寺墓地の一隅に遷座している。

現在においても疫病の扱いは非常に難しいことであり、まして防疫・衛生の体制が貧弱だった当時においては、それなりに必死の努力にも拘らず三百世帯足らずで百人近い犠牲者が出たことは想像を絶することだったと思う。合掌。